

フィールドワークにおけるリスクと真正性

——鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査を中心に——

阿 部 純一郎*

Risk and Authenticity in the Fieldwork

—Ryuzo Torii's Expedition in Taiwan and Southwest China—

Jun'ichiro ABE

要 約

本稿は、日本の海外フィールドワークの開拓者とされる人類学者・鳥居龍蔵（1870–1953）の台湾・西南中国調査を対象に、19世紀末の「探検」という調査形態を支えていた一連の想定を明らかにする。特に、調査者がフィールドで直面する「リスク」が、そこで得られる知識の「真正性」を保証するという問題含みの前提を明るみに出す。鳥居の調査スタイルは、明治20–30年代における未知なる土地の情報をもとめる知的欲望と、近代的な知覚装置（写真・印刷技術）の発達と、ヨーロッパの冒険記に刺激されたエキゾティックな想像力とが交差するなかで組み立てられたものであった。この点は、鳥居の調査が学説史上、一種の文化帝国主義、もしくは表面的な観光旅行にすぎないと批判される原因となってきた。しかし当時の歴史的文脈を丹念に追っていくと、日本国内に海外調査を「科学」として確立するために、むしろ帝国主義的／観光旅行的な旅から自覚的に距離を置こうとしていた鳥居の姿が浮びあがる。本稿では、その戦略の1つが、「野蛮・未開」なフィールドを歩く「孤独な観察者」という調査者像の創出であったことを論じる。そのうえで、このイメージを前面に押し出した結果、鳥居が観察している立ち位置の暴力性と現地社会の異種混雑性がテキストから排除されていく事態を、彼自身が学問的転換点としている西南中国調査の叙述から浮き彫りにする。最後に、鳥居が確立した調査者像が、その後の日本の人類学史のなかで、どれほど長い影響力を持ち続けたかについて論じる。

* 文化情報学部 文化情報学科

第1節 リスクと真正性

人類学者のジョアン・パサロは、学生時代にニューヨークのホームレスを調査対象に選んだとき、周りの人類学者によく聞かれたのが、「路上で（何度）寝たことがあるか？」という質問だったと回想している。彼女の「フィールド」は自宅から地下鉄で通える距離にあり、路上で夜をあかした経験はなかった。だが、そう答えると、相手はきまって失望の表情をうかべたという。特に印象的だったのは、こうした経験を求められるのが、みな「若手」研究者だったことである。脱コロニアル時代に生きる人類学者が、もはや〈未開・野蛮な原住民〉をロマン化することはないにしても、「身体的な危険に身を置くこと」は、「いまだにフィールドワークの通過儀礼の一部」であり続けている。

では、こうした見方が特権化しているのは、いかなる認識論なのか。エスノグラファーおよび／またはインフォーマントの身体的・社会的安全が危険にさらされると、いかなる権威への訴えがなされ、正統化されているのか。過大なリスクのもとで生産された／確保された知識が、「より良い」知識なのか。めったに表明されずとも根強きのこっている、こうした評価のスタンスは、遠くはなれた「原住民」から「秘密」をもぎとることが旅立ちのレゾン・デタであった時代の……植民地的メンタリティーの名残りである。(Passaro 1997: 147)

ここでパサロが巻き込まれているインフォーマルな規範の問題は、人類学のフィールドワークをその他の隣接領域、たとえば社会学のそれから区別するために用いられてきた伝統的な境界線によって説明できるだろう。クリフォードが指摘するように、「人類学は比較的最近まで、（未開で、部族的で、田舎で、サバルタンで、とくに非西洋であり前近代であるという）調査『対象』によって社会学との区別をおこなってきた。……つまり、歴史のある／なし、古代／近代、文字社会／無文字社会、遠距離／近距離といった例の一連の二元論にしたがって世界を分割してきた」(Clifford 1997=2002: 397n. 7)。近代西洋にとって見慣れぬもの（＝他者）を理解可能にするのが人類学者であるとするなら、社会学者は自明なものを見慣れないものにする（＝他者化）というわけだ。この遠くはなれた、半ば孤立した（秘密めいた）社会組織に焦点を絞ってきた人類学の伝統からすれば、大都市ニューヨークの自宅から地下鉄で通うようなパサロのフィールドワークは、やや「社会学的」すぎたといえるのかもしれない。

しかしでは、この「リスク」と「真正性」との結びつきは、そもそもいかにして成立したのか。本稿はこの問題を、日本の海外フィールドワークの原型を形づくった重要人物の一人である鳥居龍蔵の調査を通して明らかにする。鳥居の調査は、日本の人類学および（民族）社会学にマリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンの「インテンシブな」調査方法が導入される前の¹⁾、あるひとつのフィールドワークの型を示している点で注目に値する。それは「探検」という調査形態である。たとえば自らも「探検家」と称していた梅棹忠夫は、日本の海外フィールドワークの確立期を1940年代前後とし、それ以前の希少なパイオニアとして鳥居龍蔵と江上波夫の名前をあげている（梅棹 1991：608-9）。また江上波夫は、19世紀末という世界的にみても早い時期に東アジア全土を次々と踏破していっ

た鳥居の業績を評して、「わが国空前絶後の探検型学者」と呼んでいる（江上 1976→1986：269）。

日本人類学の創始者である坪井正五郎（1863-1913）を師事して徳島から上京し、1892（明治26）年に東京帝国大学人類学教室・標本整理係となった鳥居は、遼東半島をかわきりに、ほぼ毎年のペースで、台湾、千島列島北部、西南中国、中国東北部（「満州」）、モンゴル、朝鮮、そして東部シベリアをひろく旅した（表1を参照）。また1939（昭和14）年に北京の燕京大学の客員教授に招聘されてから、敗戦をはさんだ約12年間を彼は中国で過ごしている。それでもこれらは、鳥居の国内でのフィールドワークをのぞいた断片的な足跡にすぎない。

東アジア全土にひろがる鳥居の業績は、1990年代以降、調査中に撮影された大量の乾板写真が発見・公開されたこともあり（東京大学総合研究資料館（編）1991；佐々木（編）1993）、約百年前のアジアの自然や風俗を記録した貴重な資料として再評価されている。だが他方では、まさにこの調査時期と調査対象の問題が、鳥居のフィールドワークが攻撃される大きな原因ともなっている。

たとえば寺田和夫は、鳥居の海外調査は「日本の帝国主義的侵略と密接な関係がある」とする（寺田 1981：80）。それは遼東半島、台湾、満州（第2回）、そして東部シベリアの調査時期が、それぞれ日清戦争、台湾領有、日露戦争、シベリア出兵の時期と大幅に重なっているためである²⁾。また、単にフィールドの選択や調査支援の問題だけではなく、そこで組み立てられた鳥居の民族論そのものを、「文化」帝国主義として読み解いていく作業も、ポスト・コロニアルな人類学史や知識社会学の領域で進められている（小熊 1995；福岡 2003；坂野 2005）。

一方、集中的な「深い」調査を教え込まれた世代には、鳥居の調査は、その分析単位の広さという点でも、滞在期間の短さという点でも、「浅い」ものとして映る。たとえば芹沢長介は、広大な土地を次から次へと横断していく鳥居の調査スタイルは、結局のところ「旅行者的な学問」であったという。「彼の調査は旅行であり、旅行が調査そのものであったともいえる。旅行者は一カ所にながく止まることなく、つぎの目的地にむかって旅立ってゆくのがつねである。したがって龍蔵の調査は、一カ所の遺跡に落ちついて、そこを深く掘りさげるといふ余裕をもたなかった」（芹沢 1963：61-62）。鳥居の調査は「発掘」以前の表面的な「採集」に留まっているとされ、またそのことが、異なる文化圏をもつばら空間的に位置づけ、その時間的な先後関係（重層性）を問おうとしない平面的な文化論・民族論につながっていると言われてきた（芹沢 1963：64；末成 1988：59）。また参与観察を重視する社会／文化人類学者は概して、鳥居のテキストに原住民やインフォーマントの具体的な描写が乏しく、現地の制度や組織に対する理解が不足している点に不満をもらしている（大林 1976：628-29、632；末成 1988：52、62）。

だが、鳥居の調査は帝国主義に庇護されたものであり、表面的な観光旅行にすぎないと片付けてしまうことは、彼の調査スタイルが生まれてきた現場をかえって見落とす危険がある。というのも鳥居の調査は、まさにそれ自体、みずからの旅を当時の帝国主義的／観光旅行的な旅といかに差異化するか、という格闘のなかで立ち上げられてきたものだからである。そしてそのさい鍵となるのが、以下で論じるように、フィールドで調査者が直面する「リスク」の問題だった。

表1 鳥居龍蔵の海外フィールド調査の軌跡

調査期間	調査地	派遣機関	備考
1895(明治28)年8-12月	遼東半島・満州(第1回)	東京人類学会	1895.4 日清講和条約
1896(明治29)年夏	台湾(第1回:東海岸調査), 帰路沖縄へ	東京帝国大学	【乾板写真機】の初導入
1897(明治30)年10-12月	台湾(第2回:紅頭嶼調査)	東京帝国大学	同調査は東京地学協会の嘱託兼
1898(明治31)年7-12月	台湾(第3回:南部調査)	東京帝国大学	東京帝大理科大学助手になる
1899(明治32)年5-6月	千島列島北部	東京帝国大学	1899. 義和団の乱
1900(明治33)年1-8月	台湾(第4回:台湾中南部調査)	東京帝国大学	
1902(明治35)年7月 ~03(明治36)年3月	西南中国(苗族・ ^{ミャオ} ・ ^{ロロ} ・ ^{ロロ} 調査)	東京帝国大学	1901. 岐阜県白川村~石川県能登半島の横断調査(徳川頼倫に同行)で, 【蠟管蓄音機】を利用
1904(明治37)年6-7月	沖縄諸島 (本島まで伊波普猷が同行)		同調査でも【蠟管蓄音機】を利用
1905(明治38)年9-11月	満州(第2回)	東京帝国大学	1905.9 日露講和条約/東京帝大理科大学講師になる
1906(明治39)年	蒙古(第1回)	蒙古喀喇沁王府	蒙古喀喇沁王府教育顧問・男子学堂教授になる
1907(明治40)年6月 ~08(明治41)年	蒙古(第2回)	蒙古喀喇沁王府	
1909(明治42)3-5月	満州(第3回)	関東都督府	
1910(明治43)年夏	朝鮮半島(予備調査)	朝鮮総督府	1910.8 日韓併合条約
1911(明治44)年春・7月	朝鮮半島(第1回)・南樺太	朝鮮総督府・樺太庁	
1912(大正2)年春	朝鮮半島(第2回)	朝鮮総督府	
1913(大正2)年	朝鮮半島(第3回)	朝鮮総督府	1913.5 坪井, 露都ペテルブルクで急死
1914(大正3)年	朝鮮半島(第4回)	朝鮮総督府	
1915(大正4)年	朝鮮半島(第5回)	朝鮮総督府	
1916(大正5)年	朝鮮半島(第6回)	朝鮮総督府	
1919(大正8)年6-12月	東部シベリア(第1回)	東京帝国大学	1918.8 シベリア出兵
1921(大正10)年6-8月	東部シベリア(第2回)	東京帝国大学	1920. 仏パリ学士院からパルム・アカデミー賞授与 1920. パリ万国聯盟人類学院の正会員・日本代表委員
1926(昭和元)年秋	中国山東省	鳥居人類学研究所	1922. 東京帝大助教授(第二代人類学教室主任)になる 1924. 東京帝大を辞職→同年, 鳥居人類学研究所を設立
1927(昭和2)年8-10月	満州(第4回)	鳥居人類学研究所	
1928(昭和3)年4-7月	東部シベリア(第3回)・満州(第5回)	鳥居人類学研究所	28年創立の東方文化学院東京研究所の評議員・研究員に
1930(昭和5)年8-12月	蒙古(第3回)	鳥居人類学研究所	
1931(昭和6)年	満州(第6回)	鳥居人類学研究所	
1932(昭和7)年7-8月	満州(第7回)・朝鮮半島(第7回)	鳥居人類学研究所	
1933(昭和8)年8-12月	蒙古(第4回)・満州(第8回)	東方文化学院	
1935(昭和10)年11-12月	満州(第9回)・華北	東方文化学院	
1937(昭和12)年4月 ~38(昭和13)年2月	ブラジル・ペルー・ボリビア	外務省(*文化使節)	
1938(昭和13)年秋	華北		
1940(昭和15)年 ~41(昭和16)年	中国各地		1939. 北京の燕京大学(米国ミッション系)客座教授に就任 →1951.12 中国から帰国

出典: 田畑(1997:4)を基礎とし『鳥居龍蔵全集』(朝日新聞社)などより作成。

本稿は、鳥居において「リスク」ある調査を担うことが、そこで得られる知識の「真正性」といかにして結び付けられたかという問題を考察する。またこの作業を、鳥居の海外調査、なかでも彼自身が学問的転換点としている西南中国調査に関する作品までを対象に進めていく。それは、彼の調査を帝国主義的／観光旅行的とする非難が、この時期に集中しているためである。たとえば江上波夫は、鳥居の業績のうち「満蒙」（と朝鮮）調査を高く評価し、その他の地域は「単なる見聞に終始したことが多い」（江上 1976→1986：301）として解説を省いている。特に「蒙古」調査には、当時の日本の支配圏と大きく重ならないという点でも高い評価を与えている。本稿はむしろ、遼東半島から西南中国までの時期を対象とし、鳥居の調査を帝国主義的／観光旅行的な旅の様式との抗争関係のなかで捉え返していく。

第2節 探検型フィールドワークの社会的基盤

海外フィールドワークの熱心な推奨者として、鳥居は、明治20年代以降のマスメディアの発達と、物珍しい風物をもとめる大衆の欲望とを巧みに利用した。彼の最も初期の作品である「西比利亜の土人」（鳥居 1895a）は、ロシアの民族分布を記した地図と数点の現地写真入りで、当時最大の発行部数を誇っていた総合雑誌『太陽』（博文館）に投稿された。また、初の海外調査となる遼東半島への四ヶ月の旅は、『太陽』の大橋新太郎や『国民新聞』（民友社）の徳富蘇峰らのスポンサーを得て、帰国後『太陽』に連載された（鳥居 1896a）³⁾。つづく台湾調査時代にも、鳥居は地元の『徳島日日新聞』や『太陽』の紙面を用い、実地調査の必要性をくり返し説いている（鳥居 1896c, 1897d, 1901b）。こうしたマスメディアとの密な連携は、実地調査の意義を訴えるべく大衆に働きかける鳥居の姿勢とともに、彼の報告を期待していた読者層の広がりも示している。以下ではまず、鳥居の調査を支えた当時の社会的文脈について確認することにした。

当時鳥居が何度か接触していた『太陽』は、一部の専門家に限られない大衆誌として、幅広いトピックを「論説」「史伝」「小説」「地理」等のジャンル分けて掲載していた。なかでも鳥居が寄稿したのは、日本各地や世界各国の紀行文・探検記などが集められた「地理」欄である。明治30年前後の「地理」への高い関心を、五井信（2000）は、学制の成立以降「地学」が重要な一教科とされ、アカデミズムでも「地学」を名乗る団体（東京地学協会、地学会）が次々と結成されていく流れのなかに位置づけている。彼によると、ここに芽生え始めた未知なる土地への知的関心が、明治20-30年代の国民のリテラシー向上やマスメディアの発達、さらには鉄道交通網の整備（汽車旅行の普及）を通じて大衆へと拡がり、こうして見知らぬ土地の旅行記や探検記をもとめる読書空間が開かれていったという（五井 2000）。くわえて同時期の写真・印刷技術の進歩によって、風景・民族写真という読者の視覚に訴える表現手法が安価に利用できるようになった点も、この大衆化をおしすすめた促進要因として注目されている（日比 1999）。

鳥居との関連で第1に注目すべきは、東京地学協会との関わりである。同協会は、ロンドンの王立地理学協会（Royal Geographical Society）にならい、1879（明治12）年に渡辺洪基、長岡護美、榎本武揚らを中心に設立された団体で、世界各地の地誌的情報を日本の経済開発や軍事政策に役立てるため、多くの海外調査を支援していた（山室 2006：35-

41)。鳥居の調査も、たとえば第2回台湾調査は東京地学協会の囑託を兼ねており、榎本武揚によって調査中の便宜が図られている。また西南中国調査でも、長岡護美を通して現地での支援体制が整えられている。さらに鳥居は同協会の機関紙『地学雑誌』の常連寄稿者でもあり、特に台湾は調査ごとに報告を載せている⁴⁾。そもそも鳥居が沖縄、台湾、朝鮮などを調査しようとしたのも、彼自身の説明によると、当時の東京帝大総長・渡辺洪基の勧めが大きかったという（鳥居 1927：462，470）。

第2に、鳥居の調査は、当時の「探検」・「冒険」を巡るエキゾティックな想像力に彩られている。なかでも第2回台湾調査地である紅頭嶼（現在の蘭嶼）への旅は、当時日本国内に紹介された西欧の探検記・冒険記のイメージで満たされている（図1も参照）。たとえば渡航先から坪井正五郎に宛てた手紙には、横浜港から基隆港（台北）に着くまでの間、ひたすらスタンリー（Stanley, Henry Morton）の探検記を読みふける鳥居の姿がある。その光景はさながら船上でのイメージ・トレーニングである。「小生等も最早四五日以後よりはスタンレー氏の如くバナナマニオツクの旅行をいたす身と相成候」（鳥居 1897a）。台北から紅頭嶼にわたる直前にも、彼は坪井にこう書き送っている。「此六十日間は最愉快にロビンソンクルーソー的生活を為す覚悟にて朝にはカノーに乗りて遙けき海原に漕ぎ出で

夕には椰子樹下に太平洋上の月を眺むる筈に御座候」（鳥居 1897b）。到着後、彼はすぐさまテント生活をはじめ。その生活は、同じ頃この地を訪れていた伊能嘉矩（1867-1925）——総督府官僚として台湾で実地調査を行っていた——をして、「嘗てロビンソンの漂流記を読みたる当時を連想」させるものであったという（鳥居 1897c）。それは未だ読書が、実際のフィールドワークと融合している世界である。

バナナとマニオック（キャッサバ）、カヌーとヤシの木によってシンボライズされるこの「南国の風景」（鳥居 1953：191）としての台湾は、鳥居にとって、同時に「暗黒」の世界でもあった。齋藤一は、1893（明治26）年に博文館から訳出されたスタンリー著（矢部新作訳）『闇黒アフリカ』（*In Darkest Africa*, 1890）が与えた影響として、その〈アフリカ＝闇黒〉という修辞が、日本の文脈では〈台湾＝闇黒〉という修辞に転化していったと指摘している（齋藤 1999）。彼はその一例として、伊能嘉矩が『台湾志』（明治35年、文学社）のなかで『闇黒アフリカ』との連想から「闇黒台湾」と語っている箇所を引いている

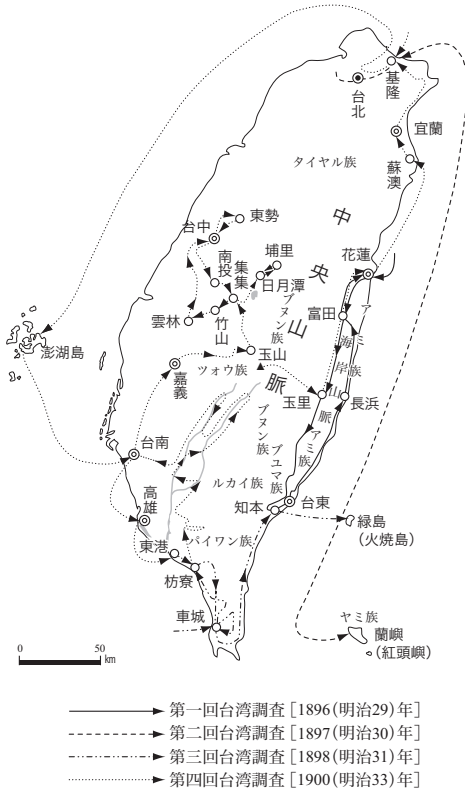


図1 鳥居龍蔵の台湾調査ルート
 (1896～1900年)

出典：佐々木編（1993：50）

が、同じような連想は鳥居にもみられる⁵⁾。第3回台湾調査中の坪井への手紙のなかで、鳥居は調査をこう振り返っている。「抑も台湾の蕃界〔先住民の居住区域を指す〕、殊に東部の蕃界は全く“Darkest Formosa”の名を得たるものなりしが、小生は幸にも幾多の危険を犯し、非常なる金銭をこれに費し、しかも三回の渡台を茲にし、聊か暗黒界裡たる東部台湾及び紅頭嶼に向て一点の燈火の光輝をあらはすを得候」（鳥居 1899：198）。

ここでは「暗黒界裡」たる台湾のイメージと同時に、それと対置される「光輝」たる自己イメージにも留意すべきだろう。つまり、〈暗黒＝野蛮〉たるフィールドを〈光＝文明〉によって照らしだすフィールドワーカーという構図である。さらに留意すべきは、「幾多の危険」と「一点の燈火」という修辞が喚起しているもうひとつのイメージである。つまりフィールドワークとは、数多くの危険がとり巻く環境の中での、孤独な作業だというイメージである。後者については次節で検討する。本節の残りでは、鳥居が暗黒世界を照らしだすために持ち込んだ文明の光、すなわち近代的な知覚装置の問題をみていく。

第3に、鳥居はフィールド調査に当時最先端の知覚装置を先駆的にとり入れた人物でもある⁶⁾。なかでも有名なのは（乾板）写真機の導入で、1896（明治29）年の第1回台湾調査が最初とされる。後に『大日本地誌』（博文館）を出版する地理学者・佐藤伝蔵の代役として台湾に派遣された鳥居は、東京帝大から写真機を購入してもらおうと、さっそく撮影法を自習しフィールドで利用した。鳥居によると、当時の人類学界・考古学界では、研究書に写真を組み入れること自体が一般的ではなく、たとえ必要でも専門の写真技師に依頼するのが普通だったという（鳥居 1936a：48-9）。つまり、研究者自身の記録手段としては写真よりもスケッチが多く用いられており、その不出来が学者の条件と考えられていたという。その意味でいうと、明治20年代以降の写真技術の進歩により、（撮影方法としても、器材の重量としても）より手軽な乾板写真が普及したことは、写真屋からの解放であったと同時に、職人的な学者気質からの開放であったともいえる。その後も鳥居はスケッチを適宜併用しているが、彼が写真機を、個人の能力に左右されない正確な記録装置と捉えていたことは、「自分はどうしても台湾の生蕃〔先住民を指す〕の顔か何かは絵で描けないので、写真の必要を感じ」た（鳥居 1936b：413）と述べている点からも窺える。

これと関連するが、写真機は鳥居にとって、正確な記録を瞬間的に切り取ってくれる装置でもあった。これは鳥居の歩き方にもつながる。都合1日しか滞在が許されなかった与那国島での調査について触れるなかで鳥居は、「凡そ人類学上、かくの如き一日しか時間が与えられないうちに、斯学上の調査をするには、いかなる条件でこの地方全体の報告を作成すべきや」と自問している（鳥居 1953：229-30）。それにはまず、島の村落や家屋や衣服を横断的に概観しながら、それらを次々と撮影していく必要がある。村人から詳しい内容を聞きだし、言語や説話を集めたり貝塚を発掘したりするのは、その後である。つまり、鳥居にとって写真機とは、フィールドの見取図を短期間で収集可能にする装置だった。

こうした写真の有用性は、印刷技術の進歩によって写真網目版が利用可能になることで現実化する。それ以前は、写真を印刷時にふたたび筆写するという、実に回りくどい方法がとられていた⁷⁾。東京帝大に提出された報告書『人類学写真集台湾紅頭嶼之部』（明治32年）や『苗族調査報告』（明治40年）は、大量の風景・民族写真とその解説文から構成されているが、こうした報告書の体裁自体が、当時の視覚・活字メディアの発達によって初めて可能になったのである。

ところで上記の報告書をみると、鳥居が写真機をいかなる人類学的関心から利用しようとしたかも推察される。そのうち最も多いのが、ある民族の全身もしくは上半身を、正面・側面・背面から撮影している写真で、これは飯沢耕太郎（1992：100）も指摘するように、鳥居の形質人類学的な関心をよく表している。つまり個人の身体を、各要素に分解し、それらを計測し、別の個人と比較し、お互いの類縁性を確定・分類するための撮影方法である。実際、写真の解説文は読者に対して、正面と側面と背面とを「対照」したり、その「比例」を見ることで全体像を把握すること、また子供と成人とを「比較」することで容貌の変化を読み取るよう促している（鳥居 1907）。と同時に注目されるのは、写真に映っている個々人の容貌が、その民族の「好標本」として提示されている点だ。つまりこれらの写真は、その民族の〈典型＝標準〉として展示されるのであり、読者はこうして一個人の容貌から民族全体の容貌まで想像するよう促される。この展示法の問題は、鳥居の調査状況を再構成していく第4節で立ち戻ることにする。本節ではひとまず、彼の調査においてカメラという記録装置が、正確な記録を短期間で収集できるという点でも、そうして集められた大量の標本を一望に観察・比較できるという点でも、（スケッチ以上に）高い位置づけを与えられていたことを確認しておこう。

人類学・考古学はカメラと離れることは出来ない。もとよりスケッチも必要であるが、殊にカメラはそれ以上に必要である。殊に現在の探査には活動写真を携帯せねばならない。カメラは決して贅沢品ではない。一般の人々の衣食住に次いで必要なものである。いわんや学者においてはこれがないければ何ら仕事することは出来ない。

（鳥居 1936a：51 強調引用者）

これは『満蒙其他の思ひ出』（昭和11年）に収録されている「考古学とカメラ」という副題をもつ文章の一節であるが、この時点までくると、調査におけるカメラの効能は、もはや自明の域に入る。ちなみに「活動写真」が日本で初公開されたのは明治30年前後——キネトスコープ（明治29年11月）、シネマトグラフ（明治30年2月）、ヴァイタスコープ（明治30年2月）——であり、撮影機も明治30年頃には輸入販売され始めていた。その後、義和団事件や日露戦争の記録映画が興行的成功をおさめると、活動写真の大衆化が一気に進んだという（田中 1980：ch. 1-2）。すでに1910（明治43）年の白瀬蘆中尉らによる南極探検隊には撮影班が同行していたことを踏まえると、現在の調査には活動写真が不可欠だとする鳥居の主張も、それほど時代錯誤的でないことが分かる。

以上みてきたように、鳥居の調査は、明治20-30年代の未知なる土地をもとめる知的欲望と、近代的な知覚装置の発達と、「探検」「冒険」をめぐるエキゾチックな想像力とが交差するなかで組み立てられたものであった。先行研究の多くは、こうした社会的背景を根拠にして、鳥居の調査を帝国主義的なまなざし、あるいは冒険主義的な欲望の産物だと結論づけてきた。しかし、その前に、我々にはひとつ留意したい問題がある。それは鳥居が当時、みずからの調査がそう非難されうることを強く意識していた点である。そこで次なる問題は、鳥居がこれらの批判に応答するなかで、海外調査の科学的権威をいかに確立しようとしたか、また、そこで動員された道具立ては何だったかを明らかにすることである。

第3節 孤独な観察者——学術探検と民族誌の創造

鳥居の海外調査の多くは、日本の領土拡張によって切り開かれた地政学的フィールドで、時期的にもその直後に行われている。おそらくこの親和性ゆえに、彼は当初から、帝国主義への典型的参加者としての役割から自覚的に距離を置こうとしていた。たとえば遼東半島の調査目的について語る際、自分の研究関心が元来シベリアや満州にあったことを再三強調しているのも、このためである。

余は遼東半島が新に日本の領地となりたるの故を以て好奇心にたけられ、同地に旅行せしに非ず。実にこれ等の地が余の研究なしつつある区域なればなり。かの学者と称せらるる人物にして、この地が再び清国に還附せらるるや直ちに遼東の研究は中止せられ、忽ち南方台湾の方面に研究点の向かふが如き、軽躁者流は余のもとより語る所に足らざるなり。いやしくも学問に従事する士は、其の目的地のたとひいづれの国に属するも、研究者自身に対しては毫も関係左右せらるる所に非ざるなり。(鳥居 1896a : 574)

その後の鳥居が、遼東研究を中断し、領有直後の台湾に向かうことを考えると、上記の発言も皮肉である。ただし、ここでの問題は、鳥居の発言はその後の行動と矛盾しているとか、鳥居でさえも時代の潮流に巻き込まれざるを得なかったということではない。問題は、上記のような発言がなされなくてはならなかった当時の言論状況である。つまり鳥居の調査を、単なる「好奇心」に駆り立てられた「軽躁者流」の旅行として非難する声の存在である。この緊張は少なくとも、本稿の分析時期である蒙古調査以前まで続いており(鳥居 1936a : 25)、しかもその緊張が、鳥居が「机上の書物漁り考証学者」と揶揄している、いわゆるアームチェア人類学者からの攻撃を指していたことも分かる⁸⁾。

鳥居にとって重要な課題は、海外での実地調査がまだ主流ではなかった当時の人類学界において、フィールドワークの科学的権威をいかに確立するかという問題に置かれていた。そのための鳥居の戦略は、人類学における実地調査の必要性を訴える一方、それを単なる好奇心にもとづく旅の様式から区別することであった。彼が『太陽』に掲載された論考「台湾生蕃地探検者の最も要す可き智識」のなかで、日本の台湾研究の現状を「実地に調査せざる空論」と喝破しつつ、その一方で「人類学的智識」を欠いた旅行を「益なきのみならず、反って斯学の有害なるもの」と攻撃しているのも(鳥居 1897d : 409)、この文脈で理解される。

特に注目されるのは、鳥居の場合、科学的調査をその他のアマチュアリズムから区別する際に、調査中の困難や危険といった「リスク」の問題が前面に押し込まれてくる点だ。たとえば遼東半島からの通信のなかで、鳥居はフィールドワーカーの心構えについてこう語っている。

探検〔ママ〕旅行は、一寸外見よりせば頗る気楽なる様なれども、実は是程困難なるものは可無之と想像致候。其は第一、身体を健全に保たざる可からず。若し途中にて病を生ぜんか、これが為旅行に不都合を来すを以て、常に摂生に注意せざる可からず。第二、規則的の行ひを要する事。旅行中見聞の事どもを其日宿泊せし処にてかき改め、且

つ其日の日記を付けざる可からず。猶起るも寝るにも厳然たる一定の時間を定め、荷物其外携帯の所持品は出立の際と、初て宿に着しとときと、寝る時とに、能々整理なし置かざるを得ず。第三、勇氣。外国を旅行するには此氣性なくては決して深く進む能はず。場合によりては正当防衛上、人間に向て不得已非常手段をも行はざる可からざる事あり。(鳥居 1895b: 453 強調引用者)⁹⁾

末尾の「正当防衛上」「非常手段」を行使してもやむを得ないというのは、具体的には武力的威嚇をさす。事実、遼東半島において鳥居は、一等軍医の大西秀治という人物から護身用として六連発のピストルを手渡されている。また台湾調査時代にも、台北の円山貝塚を掘りおこしている彼の腰にはピストルが身に付けられていた。たとえ鳥居本人がそうした武器をもたなくても、彼の調査には大抵、その土地の政府機関から派遣された付き添いの護衛たち——ときに数十人におよぶ——がとり巻いていたのである。

ただし、鳥居の調査を支えていた暴力的背景を明るみに出すことが、ここでの目的ではない。むしろ考えたいのは、鳥居はこうした自らの調査をとり囲んでいた暴力の問題を、帝国主義に庇護された調査として非難する声を意識していたにもかかわらず、どうして隠そうとはしなかったのか、である。

たとえば山路勝彦(2004: 64-65, 77)は、鳥居のテキストにたびたび現れる冒険主義的なヒロイズムについて、それは植民地政策に積極的にコミットした「帝国主義のイデオログ」の姿ではなく、むしろそこからはみでた「無邪気な冒険野郎」「一途の好事家」の態度と呼ぶにふさわしいと、その非政治性を示唆している。しかしこれに対しては逆に、その無邪気さは自らの調査を支えている政治性に無自覚な態度にほかならない、と非難することもできよう。だが本稿は、このどちらとも違った視点をとる。我々はむしろ、鳥居は帝国主義に庇護された調査として非難する声を強く意識していたからこそ、調査の暴力性を明るみに出したのではないかと考えたい。そう考えることによって、調査の正統性を主張すべく政治性から自覚的に距離をとることが行き着いた政治性——つまり調査の科学的権威づけと帝国主義との内在的結びつき——を理解することが、以下での我々の目的である。

たとえば調査中にピストルを所持することは、鳥居にとって調査の客観性と必ずしも矛盾するものではなかった。実際それは、「気楽なる」旅行とは区別される「困難な」探検というイメージを喚起するうえで有効なひとつの挿話＝物語として機能している。物語といっても、調査中の苦難についての語りが〈嘘＝非真実〉だという意味ではない。ここではそれを、「書く」という行為におけるひとつの「選択」という意味で用いる(Van Maanen, 1988=1999: ch. 1; Clifford and Marcus 1986=1996; Cf. Barthes, 1984=1987)。というのも、この点を伏せておくことも可能だからである。なるほど民族誌はフィールドワークの結果ではあるが、フィールドワークと民族誌が生産される現場はけっして連続的ではない。

民族誌が集中的な調査経験を通じて文化解釈を生産するというのならば、荒々しい経験がどのようにして権威的な記述説明に変換されるのだろうか。言い換えれば、権力関係や個人のそれぞれ異なる目的に貫かれ、饒舌で多元的に決定されている異文化間遭遇が、ひとりの書き手個人が作り上げた多かれ少なかれはっきりとした境界をもつ「他世

界」の適正なヴァージョンとして、どのように領域化されるのだろうか。

(Clifford 1988=2003: 39)

鳥居は『太陽』に連載された論考のなかで、自分のテキストから読者に何を感じてほしいか、について説明している。「余はあえて諸君に面白く本篇を読んでもらう事を望まぬのである。余はなるべく諸君に、世の学術探検家がその学術調査のため、いかに苦心なしつつあるかを知らしたいのである」(鳥居 1901b: 432)。では、調査中の「苦心」を前面に押し出すことで、彼はいかなる「学術探検家」と「学術調査」のイメージを喚起し、また創出しようとしたのか。

ここで再び、探検家の心構えに関する先の引用にもどろう。すると、鳥居のいう「探検」が、文明化のなかで失われてゆく原初の風景を求めるようなロマン主義的な衝動ではないことが分かる。むしろそれは、野蛮・未開な世界のなかで文明的・近代的な自我を維持する実践として語られている。すなわち、身体を管理し、規則的に行動し、心の平静を保ちつづける実践として。では、こうした語りが喚起するのは、いかなる調査者の姿か。それは、肉体的にも心理的にも過酷な環境のなかで、自己を規律化しつづける〈孤独な観察者〉のイメージである。言いかえればそれは、本国の書齋で——もちろん孤独ではあるかもしれないが——作業する学者とも、気軽な観光旅行者とも区別される行為者モデルを創出している。

以上の解釈を裏付けるために、次に鳥居が日本の人類学のなかで確立しようとした書き方の問題にも触れておきたい。それが「旅行日記」——鳥居はそれを「民族誌」とも呼ぶ——というジャンルの確立である。

鳥居がフィールドでの体験を「旅行日記」として自覚的に出版し始めるのは、明治末から大正期にかけてである。そのうち調査時期として最も早いのは¹⁰⁾、西南中国に出发し帰国するまでの約八ヶ月間のフィールド日誌を、主篇と別篇をふくむ全124章にまとめあげた膨大な旅の記録『人類学上より見たる西南支那』(大正15年、以下『西南支那』と表記する)である。以下では同書を中心に、鳥居における「旅行日記」の位置づけを確認することにしたい。先取りすれば、アームチェア人類学者とアマチュア旅行家が「学術探検家」の否定項とされたのと連動して、ここでは論文報告と紀行文学が「旅行日記」(民族誌)の否定項に位置づけられていく。

鳥居は『西南支那』において、一人称つまり〈私〉の語りを中心にして組み立てられたテキストの意義を擁護している。彼によれば、従来日本の学者が発表してきたのは、少数の専門家を対象とする難解な報告書ばかりであり、それだけが正統な学術書と見なされてきたという。だが、今日欧米の学界では、論文報告の前に旅行記を出版するのが一般的で、これら二種類のテキストが同じく正統な評価を与えられていると語る¹¹⁾。そのうえで、彼はこうした欧米の慣行にならい、日本国内でもフィールド日誌を刊行することの意義を次のように訴えていく。すなわち同書は、「余はその土地をいかに旅行したか、その土地の山・川・人情・風俗と我らとの交渉は如何というものを主にして」書かれた「飾らざる偽らざる、素直な日記文」であり、そうした記録は「直接人間に関係して居る」人類学にとって「学術研究書」と同等の価値をもつと主張する(鳥居 1926: 518 強調引用者)。こうして〈私〉がフィールドをいかに見てまわり、そこでの自然や現地の人達といかに触

れ合ったかという個性記述的な叙述スタイルが、「素直」な描写という直接的現前の修辞により、ある種の客観性を付与されることになる¹²⁾。

ただし注意しておきたいが、鳥居がここで現地社会との「交渉」と述べていても、それは決して現地住民の内部者として語ることではない。少なくともこの時期の鳥居は、フィールドで得られたみずからの知見を権威づける際、自分がその共同体の一員として認められたとか、現地の住民とある種の親密な関係（ラポール）をもったとか主張することはほとんどない。むしろ彼が再三強調しているのは、その調査がいかに苦難に満ちた孤独な営みであったか、である。またこの点が、彼の旅行記を、その他の旅行記から隔てるメルクマールとしても用いられている。つまり、鳥居の旅行は「普通の遊山的旅行」とも（文学者の）「単に趣味の紀行」とも異なる「探検的性質」を帯び、そこでの「天然・人為の危険・不便の余暇を利用して燈火の下で記したもの」が、彼のいう「旅行日記」（民族誌）なのである（鳥居 1926：221, 517-18）。

だから従来論じられてきたように、鳥居の民族誌に冒険主義的なヒロイズムが滲みでており（山路勝彦）、また現地住民との具体的な人間関係の描写にも乏しい（末成道男）という指摘が全くその通りだとしても、これは単なる方法論的自覚の乏しさではなく、むしろ民族誌の科学的権威づけのためのひとつのヴァージョンとして押さえるべきである。そしてそのさい重要な役割を果たしているのが、「危険・不便」なフィールドを相手にしつつ「燈火の下」で日誌を書いているという、〈孤独な観察者〉としてのフィールドワーカーのイメージだったのである。

第4節 フィールドにおける民族接触と異種混溶性——西南中国調査を中心に

第1項 危険な真実

前節では、鳥居にとってフィールドでの「リスク」（「危険・不便」）が、彼のいう「学術探検」及び「旅行日記」（民族誌）の科学的権威付けにとって不可欠の役割を果たしていたことを確認した。ただし、調査者が直面するリスクそれ自体が、そこで得られる知識の「真正性」と結びついていたと押さえるのは、やや一面的な理解である。この両輪をつなぐもうひとつの重要な想定がある。それは近代文明からとり残されているほど、その土地には外来文化の混入が少なく、したがって民族の〈純粋な姿〉が残っているはずだ、という想定である。つまりそれは、外部からの影響関係を極力排除したかたちで分析単位を設定すべきだ、という方法論的規範と結びついている。

大小ふたつの島々からなる紅頭嶼（ポテル・トバコ）はその意味で、鳥居にとって天然の実験室だった。

この二つの島はヤミ族だけが占拠し、また随時出入しているのであるが、彼らは台湾のあらゆる種族の中でもっとも野蛮で未開な種族である。人類学上の見地からいえば、またいうまでもなくその見地からだけのことであるが、それはかえって幸いなことである。なぜならば原始的な状態にある他のあらゆる種族に近づけば近づくほど、その気の毒な種族から引きだしうる資料がますます貴重なものとなり、ますます真実となるからである。（鳥居 1910：5-6 強調引用者）¹³⁾

他との接触交通の少ない「原始的な状態」にある「野蛮で未開な種族」であるほど、人類学にとっては「貴重」な資料となり、「真実」の価値を帯びることになる。ここではフィールドの「リスク」が、〈野蛮・未開＝自然・純粹〉という想定を媒介にして、そこで得られる資料の「真正性」を保証している。ただし、この因果連鎖は鳥居において可逆的ともなり得る。つまり、民族の「純粹」な姿を見るためには「危険」がともなうというだけではなく、調査者にとって「危険」な場所にこそ「純粹」な姿があるはずだ、という想定が生まれてくる。この場合、リスクは真正性の徴候となる。

この“真実は危険な場所にある”という想定は、鳥全体が「原始的な状態」と見なされていた紅頭嶼調査では表面化してこない。しかし鳥居が台湾先住民（生蕃）との人種的類縁性を確かめるために訪れた西南中国の苗族・猯猯調査では、この想定が彼の調査ルートをたびたび左右している。たとえば雲南省から四川省にむかう旅路を選択する場面。「後者はマルコポロのとった路であって、旅行には最も安全であるが、前者はこれに反してはなはだ危険の虞れがある。けれども蛮族の調査をとげようとするには、むしろこの危険な路を選ばなければならないのである」（鳥居 1926：353-54）。だから鳥居の調査が「危険」であったことをひとまず認めるとしても¹⁴⁾、それは彼が「あえて」選択した危険でもある。そしてより重要なのは、鳥居が意識的に調査ルートを設定しなくてはならないほど、西南中国は彼にとって、（台湾に比べて）民族の純粹な姿が失われつつある空間と映ったということだ¹⁵⁾。では、こうしたフィールドの混交性の問題に対して、鳥居はいかなる姿勢で対峙し、応答したのか。

第2項 風景と民族性

鳥居にとって台湾が「南国の風景」であるとするなら、西南中国は「山水画」（鳥居 1902, 1926）であった。あるときは船で、あるときは馬で移動していくこの旅人の眼は、いたるところで大河と峡谷と曠原からなる長閑な景色に魅了されている。特に注目されるのは、こうした風景の違いが、そこで暮らす住民たちの民族性の違いに対応しているかのように語られ、その相応関係が過度に一般化されている点だ¹⁶⁾。それは、獐猛で野蛮な気質をもつ「生蕃」に比べて、非常に「温厚」かつ「陰鬱」な苗族の姿だった（鳥居 1926：273, 289-91, 295-97, 302）。

温厚・陰鬱という苗族の性格描写は、『西南支那』にとどまらず、その他の論文や講演記録、さらに『苗族調査報告』でも一貫して主張されている。また、『西南支那』では専ら心理的なパーソナリティの次元で語られているが、別のところでは体質や芸術の次元にまで拡張されている。たとえば西南中国の風景・民族を写した全88枚の写真をふくむ『苗族調査報告』では、苗族の写真に形質学的説明を加えつつ、「陰鬱」な容貌だとしている（鳥居 1907：276）。さらに苗族の民族芸術について、「ごく陰鬱な沈着な気質をよく現して居る」と畳み掛けろくだりは圧巻である。つまり、苗族は「銅鑼とか皮太鼓のようなごく喧しい物でなくして、静かな笙とか笛のようなもの」を好む。また、その音色も「ごく沈静な音」で、「梵鐘のような、至極サブライムの所がある」。そして「謡う所の歌も恋愛を主として、悲哀な調子を謡うので、決して勇壮活撥というような歌はない」。さらにその踊りも、南洋諸島やその他の「野蛮人」のような「忙しい踊り」ではなく、「ごく静かに笙に合わせて踊って居る」（鳥居 1905：389-90）。

こうして寧猛・活発／温厚・陰鬱という二項対立で捉えられる苗族であるが、この図式はさらに、その土地を訪れる旅人の危険／安全という対立軸を用意し、そこに連結されていく。つまり、「現今の苗族」は「台湾の生蕃」ほど「乱暴」ではなく、それゆえ「台湾の生蕃地を旅行するつもりでシナの苗族地を歩けば、雑作なく歩けまして、ごく平気で、困難はない」と語られている（鳥居 1903c：376）。さらにこの図式は、未開・純粹／接触・絶滅の対立軸とも連動する。すなわち、今日の苗族は「自然的の生活」を離れ、次第に「シナ化」しつつあるため、もはや「未開なる野蛮人」とは呼べない。そのため、「今日苗族の調べは最も必要であって、今日を過ぎ去ったならばよほど困難であろう」と語られている（鳥居 1903c：377, 1905：389-91）。

こうした語りが喚起するのは、次のような一連の対立軸によって構成される二元論的な世界観である。すなわち、〈台湾・先住民／中国・苗族〉＝〈南国／山水画〉＝〈寧猛・活発／温厚・陰鬱〉＝〈危険／安全〉＝〈未開・純粹／接触・絶滅〉である。さらに、こうした自然（風景）と民族性との結びつきは、台湾と中国の間だけではなく、苗族と「猯猯」¹⁷⁾の対比として西南中国内部でも展開されていく（図2を参照）。

鳥居によると、「苗族の根拠地」とされる貴州省を抜けて昆明（雲南省）から四川省へと北上するにつれて、そこは山岳奥地の「猯猯の巢窟」である。注目すべきは、この一帯に入るにつれ、鳥居がまるで「台湾の生蕃地」を歩いているかのように感じ、現地人と「台湾生蕃」との共通点を指摘する回数が圧倒的に多くなってくることだ（鳥居 1926：322-435）。猯猯は「蛮風」を保ち、気質も「暴悪」、体質は「身体強健・気風勇壯」、さらに容貌も「猛悪」「悪相」と彼はいう。そしてこの「太古の如き原始的の光景」を抜けると、ようやく漢民族の多く暮らす「人間界」に出る（鳥居 1926：433）。

こうした描写を、蔑視的な用語の数々はひとまず置いて、さまざまな民族の地理的分布を確定しようとする鳥居の研究関心の表れとして理解することは可能だ。またこの点で、

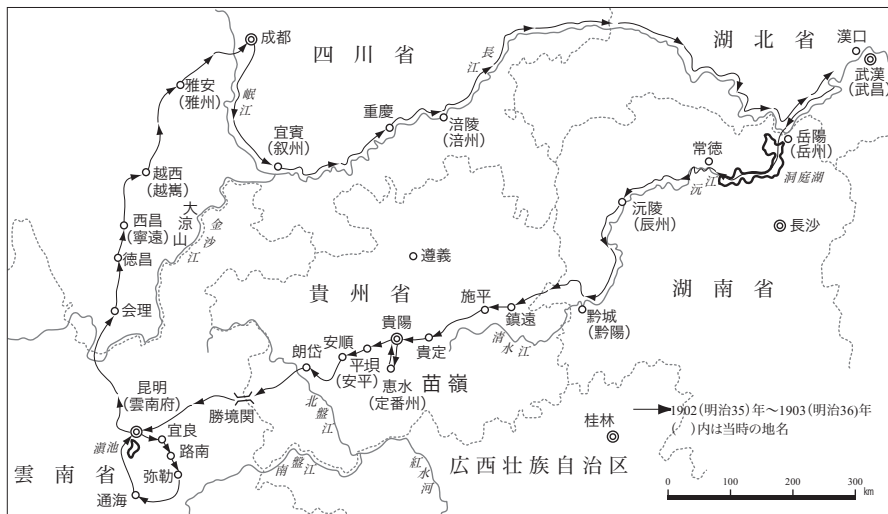


図2 鳥居龍蔵の西南中国調査ルート（1902-03年）

出典：佐々木編（1993：56）

自然環境と民族性とを相応的に把握しようとする鳥居の生態学的発想、また山脈や河川等の自然の分界線を境にして民族が地理的に分布しているという鳥居の観察眼は、従来高い評価を与えられてきた（大林 1980：306）。それでもやはりこの図式は、あまりにもあまりすぎているように思われる。我々は以下で、この一般化された図式が周縁化してしまう問題を遡上にのせる。

第3項 民族接触としての観察

まず鳥居の調査が、現地の住民から様々な抵抗をうけていたことを確認しておこう。たとえばカメラを向けると、かれらは家に逃げ込んだり、大声で叫んだり、身体を揺らして抵抗する（鳥居 1926：236, 244, 332）。また、住んでいる村や民族名をたずねても答えてくれない。単語を聞き取ろうとしても怖がって逃げようとする。そもそも鳥居たちを見ただけで、村に駆け込み、戸をかたく閉じてしまう（ibid.: 269）。追いかけて運よく捕まえても、平伏して顔をあげない（ibid.: 295）。近づこうとすると、震えて一言も発しない（ibid.: 297）。かと思うと「日本人だ」と群がり通行を妨害する（ibid.: 248, 252-55）。先述したように、少なくとも旅行記に描かれている鳥居と現地住民との間には「ラポール」と呼べるような親密な関係は、最後までなかった。彼は至るところで、よそ者かつ敵として扱われている。

問題は、こうした現地の人々の調査に対する不安や怖れを、鳥居がかれらの民族性に帰属させていることだ。たとえば苗族の性格描写（「臆病」「遅鈍」「怯懦」「幼稚」「懦弱」）が集中している箇所をみると（鳥居 1926：295-302）、この描写が上でみたような調査に対する消極的抵抗をさしていることに気づかされる。この文脈でみると、『苗族調査報告』



B 背苗女子



A 打鉄苗少女

図3 『苗族調査報告』掲載写真

出典：鳥居（1907：227, 241）

*左の写真（図版6）の説明には、「右方なるは、強ひて頭部の布を取り去られたるを以て、悲怨の情を表せり」（鳥居 1907：268）と記されている。右の写真（図版20）の説明には、「中央の少女は頭髪の様を見んため、被れる黒布を取り除かんとするに際し、応ぜざる状態にして、忿怒の情、顔面及び態度の上に表れたり」（鳥居 1907：272）と記されている。

に載せられている写真の数々も意味深長になってくる。そこには「悲怨の情」・「忿怒の情」(鳥居 1907: 268, 272)でカメラを見つめている苗族の少女が写っている(図3を参照)。それは彼女らの頭巾を、鳥居が頭部撮影のために引き剥がそうとしたからである。同書における男女の容貌はどれも苗族の「好標本」であるとする鳥居の解説文は、こうした撮影状況と照らしあわせて読む必要がある。つまり、温厚・陰鬱たる苗族の姿は、かなりの程度まで、鳥居によって〈挑発された真実〉である。

このことは、たとえ鳥居が苗族の性格を、(不変の本質ではなく)異民族との接触という歴史的出来事にもとめていても変わらない。彼は義和団の乱(1899年)の暴力的鎮圧の影響を語っている。「彼らの性質は、清朝の初期における如き剽悍犖猛の風はすでに無くなって、極めて温順柔和である。けだしさにシナ政府から大打撃を加えられた影響によるのであらう」(鳥居 1926: 275)と。だが、鳥居のいうように、苗族の性格が中国人への恐怖心に由来するのだとしても、それはまた鳥居に対する恐怖心でもある。というのも、常に中国人の護衛に囲まれていた彼のことを、現地の人たちが、完全に体制側の人間だと考えていたことは疑いないからだ¹⁸⁾。現在の苗族の性格を、それ以前の漢民族との接触に帰属させることは、この日本人の調査自体が、かつての暴力を背景に、いまだ継続中の、民族接触の一部なのだという事態を周縁化することになる。

たとえば現地で「東洋鬼」と罵倒された経験(鳥居 1926: 249, 306)について述べている以下の一文は、現地住民による調査の妨害を、ただただ不当な扱いと捉えている彼の姿がよく表れている。

小生は非常なる強硬手段を以て旅行いたし居候、小生に向つて「東洋鬼」など呼ぶものあらば直ちに其地方官にかけ合ひ居候、すでに二日以前小生に向つて「洋鬼」と呼びし男ありしかば、直ちに地方官に談判いたし候、地方官は忽ち彼を捕へ来り罪し申候、若し地方官にして外人に対し不都合なる取扱あらば遠慮なく談判すべし、仮令ば知県にして不都合あらば知府に談判すべし……〔中略〕……若し小生の荷物、其他のものにして途中なくなりたることありたりとせば、直ちに小生は地方官に談判いたす考へに候、されば旅店に宿るも少しも心配のこと無之候、旅行は兵卒の護送あり、又当日の宿所はすでに役所より尤も其地にてよろしき客棧(宿屋)をとりくれ居候、然して其入るに紅紙もて、「日本鳥居大人公館」とかきはりつけ、他の客を断り居候、宿につくや、其地の役人は必らず贈物有之候、日々羊、豚、鶏等を贈らるるを以て日々御馳走は有之候……。(鳥居 1903a: 170)

現地住民の抵抗を生みだしているのも、それでいて抵抗は消極的なものとどまり、あくまで調査中の「安全」は確保されているのも、この鳥居をとり巻き、みずから積極的に利用している不平等な権力構造に由来する。レナート・ロサルドが指摘するように、数々の「苦難」に直面しながらも奇跡的に調査を「達成」できたフィールドワーカーという物語は、そうした「苦難」(＝現地の抵抗)と「達成」(＝調査中の安全)を共に引き起こしている支配の文脈を周縁化してしまう危険がある(Rosaldo, 1986=1996: 161-72)。つまり、苗族の消極的抵抗を、かれらの民族性もしくは漢民族との接触に帰属させるとき、かれらと差し向かいに立っているはずの観察者側の作用力は、テキストから閉めだされてしまう

のだ。

この調査者が観察している立ち位置＝ロケーションの忘却は、自然の分界線を境にして各民族が分布しているという鳥居の観察にも関わってくる。ここで純粋な民族をもとめる鳥居の一貫した関心からみて¹⁹⁾、奇妙にも興味ぶかい問題がある。それは、彼が調査の途上でたびたび、異なる民族が雑居しあう場所に留まり、そこを重要な研究拠点にしていることだ。たとえば鳥居は、貴州省の「政治・軍事の中心地」かつ「最も繁華な都会」とされる貴陽府一帯を、苗族調査の重要な拠点と捉えている（鳥居 1926：277-83）。また「貴州・広西・雲南・四川の四省を連絡する交通の中心点」に位置する朗岱付近も、「苗族調査において最も便利であるのみならず、苗族と猓羅と互いにあい衝突せる状況を研究する上においても、最も適当にかつ最も興味ある場処」と語る（鳥居 1926：298）。さらに四川省の「山中の一大府」とされる寧遠府（西昌）一帯も重視されているが、ここは鳥居によると、各種の猓羅族や「西藏人」・「西蕃」〔チベット族及びチベット系の諸集団をさす〕が混住している地域である（鳥居 1926：385-98）。

では、どうして鳥居は他との民族接触が少ない（と彼自身が思っている）場所ではなく、民族接触の最も激しい（と思う）場所を、研究拠点に選んでいるのだろうか。それは単にこの空間が、各民族の居住区域が分岐する地理的な境界線になっているからではない。より重要なのは、この空間が、そこを訪れる旅人（＝鳥居）に対して、異なる民族を一望に観察・比較できる視座を与えてくれる点にある。彼の言葉を借りれば、そこは「居ながらにして各特色を調査することの出来る一種の群族展覽会場」、つまり「人類学博物館」のような空間だったのである（鳥居 1926：278-79, 298；1903d：253）。ここで描かれている情景は、未開な土地において民族の純粋な姿を直接観察しているフィールドワーカーの姿とは全く逆のイメージである²⁰⁾。それはむしろ「都会」で、そこに集う諸民族を観察・比較することで民族間の差異を抽出し、その「特色」（＝固有性）を再構成している姿だ。これと同じような比較を読者に促す鳥居の姿を、われわれは彼の民族写真の展示法を論じた第2節でみてきた。

ただし、ここで鳥居に「人類学博物館」のような光景を見せている現場は、写真集の世界とも実際の博物館とも大きく異なる。なぜなら、そこでの展示品（生身の人間）は相互に接触しあうなかで、その「特色」を刻一刻と変化させていくからだ。さまざまな民族を一望に観察・比較し、その固有性を再構成しうるロケーションが、同時に、その固有性が解体され新たな混成文化を生みだしていく場でもあるという問題は、少なくとも鳥居にとっては十分逆説的だったはずだ。だが、この両義性は一切触れられていない。民族接触を常に「土俗的絶滅 ethnographical extinct」（鳥居 1901c：111）として捉える鳥居は、この「終わりの始まり」を予感させる混成的な空間こそが、今まさに「絶滅」しつつあるとされる、その民族の固有性を調査者に再現可能にする場にほかならないという事態を、テキストから周縁化している。

結語 探検型フィールドワークの遺産

本稿では、鳥居の台湾・西南中国調査を中心に、19世紀末の日本人類学において「探検」という調査形態が確立されていく過程を分析した。そのさい本稿では特に、鳥居の民

族誌のなかで、フィールドの「リスク」（身体的危険、精神的孤独）が、そこで得られた知識の「真正性」を保証するうえで不可欠の役割を果たしていたことを明らかにした。と同時に、この結びつきがいかにして確立されたか、またそれに伴って、鳥居のテキストから調査地のいかなる現実が締め出されることになったかを分析した。その要点をまとめれば、以下の通りである。

第1に、フィールドの「リスク」を強調する鳥居の語りは、実際の調査状況を単に描写したものではなく、帝国主義的／観光旅行的な旅を否定項にしつつ海外調査を科学的に権威づけるための言説戦略として押さえる必要がある。その背景には、日本のアジア進出にともなう旅行者の増加・拡大に加えて、海外調査の科学性がいまだ認められていなかった当時の人類学界内部の勢力争いの問題が存在した。現在の時点から、鳥居の調査を冒険主義的なヒロイズムであるとか、現地住民との人的交流に乏しいといって非難するだけでは、まさにそうしたフィールドでの危険性や孤独性こそが、調査の正統性を支えていた当時の学説的文脈が見過ごされてしまう。逆にこの点を押さえることで、我々は日本のフィールド調査史と帝国主義との結びつきについて、より深い理解に達することができる。というのも、鳥居が創出した〈孤独な観察者〉という自己表象は、同時に他者表象、つまり〈未開・野蛮・純粹〉たる現地社会のイメージを産出し、それと支えあっているからである。

第2に、鳥居の民族誌を批判的に吟味するなかで我々は、〈未開・野蛮な原住民〉という——台湾調査までは少なくとも維持しえた——他者表象が、西南中国でいかに修正を迫られたか、また、それに対して鳥居がいかに応対したかを分析した。そのさい特に、自然環境と民族性との相応関係を過度に一般化して描く鳥居の叙述スタイルが、現地社会で進行していた以下の2つの民族接触あるいは異種混淆性をテキストから締め出したことを明らかにした。

第1は、調査者（鳥居）と現地住民とのコロニアルな接触であり、鳥居は調査に対する現地住民の抵抗を彼らの民族性に帰属させることで、観察者の存在が調査地に及ぼす影響力や、鳥居の調査を支えていた支配の問題を周縁化した。第2は、ある民族の“固有性”や“差異”を観察可能にする場が、まさに鳥居が民族の「絶滅」の空間と捉えた、異種混淆的な場にほかならないという事態を周縁化した。

ただし、こうした異種混淆性の忘却は、鳥居に限られる問題ではなく、その後も長い伝統として日本人類学の調査姿勢に強い影響を及ぼしてきたように思われる。

鳥居が写真機を導入してからおよそ百年後、梅棹忠夫（1992）は人類学調査における写真、彼のいう「民族誌写真 ethnographic photography」のあり方について語っている。彼にとって海外フィールドワークの先駆者であった鳥居は、ここでも「先駆的な民族誌写真家」と位置づけられている。特に注目されるのは、そこで梅棹が、戦後カメラの大衆化が急速に進むなかで、民族誌写真家（観察者）と被写体（調査対象）との関係も次第に「ハレ」から「ケ」へと変化していると語っている点である。つまり、写真撮影が形式ばった儀礼のようなものだった鳥居の時代とは異なり²¹⁾、今日では民族のリアルな日常が撮影しやすくなっているという。

では、このカメラ大衆化時代の人類学者が撮影する、〈民族のリアルな日常〉とは、実際にいかなるものであったか。この点について梅棹は、一般の旅行者とバック・ツアーに参

加したとき、彼らの写真と、民族誌写真家としての自分のそれとの間に「重大なちがいが」を発見したと語っている。

現地風俗をとる場合でも、旅行団のだれかがいっしょにうつりそうときは、注意してフレームのそとにはずしているのである。そうでなければ、民族誌の材料にはならないのだ。現地語の録音をとる場合も、ネイティブ・スピーカーの声だけを録音して、その他の音声が混入することを注意ぶかくさけるのとおなじである。ましてや、わたし自身が自分のカメラにおさまるということは、まずない。……わたしたちの目がとらえるのは、現地で生活している「民族」とその環境である。……写真は、外界の存在をうつしだすけれども、しばしばそれは、内面的な心象風景の外的投影であることがある。外なるものをうつしながら、じつは内なる心象風景をえがきだしているのである。わたしの民族誌写真には、そういうものはまったくない。現地に生活する人たちに、わたしたち自身の内的世界を投影してはならないのである。かれらは、つねに徹底的に客観的な存在であって、わたしとはなんの関係もないものとして、とらえなければならぬのである。(梅棹 1992: 551-52 強調引用者)

ここで梅棹はくり返し、写真家＝人類学者の主観的欲望を、被写体＝調査対象たる民族の世界に投影することを固く禁じている。というのも、そうして出来上がったフィルムに映しだされているのは、彼にとって「客観的な」民族の姿ではなく、いわば人類学者の自画像にすぎないからである。しかし我々はここで、この「民族とその環境」をありのままに撮ろうとしている人類学者が同時に、その被写体の構図にどこまでも「注意ぶかく」こだわっている人物でもあることに気づく。おそらく彼は、自分のカメラの前を観光客が通りすぎるまではシャッターを押さないだろうし、フレームから外れるように別の角度から撮影するだろう。だが、そのとき閉めだされた被写体、つまり、民族衣装を着た現地の人々のすぐ近くをカメラをぶらさげて立っている観光客の存在、そしてこの団体客の一員でもある彼自身の存在は、果たして「民族とその環境」にとって「なんの関係もないもの」なのだろうか。

というのも、この観光地化のプロセスに「民族とその環境」がすでに決定的に巻き込まれていることを、実は梅棹自身があちこちで認めているからだ。たとえば彼は、カメラの普及とともに、調査対象たる民族の側にも「写真ずれ」が起きていると語る(梅棹 1992: 562-63)。また民族衣装を着た姿を撮らせて商売する「観光マサイ」の出現にも触れているが、これは先の写真家(観察者)と被写体(調査対象)との関係の日常化(＝「ケ」)を可能にしたものが、他ならぬ観光地化のプロセスであった点を示唆している。さらに彼は、あるヒマラヤ登山家がチベット人を撮影しようとしたところ、相手もカメラを持ちだしてきたという逸話を紹介しているが、その真偽はともかく、この撮る／撮られる関係の逆転も、単純だが重要な問題を語っている。つまり、見る側も見られており、見られる側も見ている、ということだ。写真家(観察者)と被写体(調査対象)は「なんの関係もないもの」どころか、観察行為はまさにこの対面的相互行為の場で起こっている。ミシェル・レリスの言葉をかりれば、「調査者が調べている社会の中に調査者が存在する」、ただそれだけのことが「当の相手に、別の光のもとで自分の習慣を眺めさせ、もろもろの

地平を開いてしまう」(Leiris, 1966=1971: 154)。つまり観察行為もまた、対象社会の現実の一部として組み込まれ、作用しているところの、ひとつの民族接触である。

調査対象たる民族の「客観的」現実が、観察者たる民族の存在から断ち切られていく場が、まさに双方を分かちがたく結び付けている民族接触の場であるという点で、鳥居と梅棹が示している問題系は、その歴史的時点を大きく異にしながらも共鳴しあっている。これまで長いあいだ、孤立した未開社会を観察してきたとされる旅人たちは、むしろそこで、混成的な、都市的な空間に立ち会っていたのではないだろうか。

フィールドを「博覧会」として捉える鳥居のまなざしは、この点で示唆的である。なぜなら、それは鳥居の観察が立脚している場の混成性を指し示すと同時に、それがあくまで鳥居にとっては、さまざまな民族や文化が交じり合いながらもある種の“まとまり”を保った空間として認識されていたことも示しているからだ。とすれば、この「博覧会」というメタファーはまさに、当時の人類学者のフィールド認識を凝縮したものではなかったか。

この意味で興味深いのは、鳥居が西南中国のフィールドを「博覧会」のようだと語った1903(明治36)年が、日本の博覧会史上初の〈原住民展示〉がなされた年でもあったことである。生身の人間を展示するというこの企画には、坪井を中心に東京帝大人類学教室の面々が多く関わっている。したがって、〈博覧会としてのフィールド〉で鳥居がいかなる認識を生みだしたかを確認した我々は、つぎに実際の博覧会で何が起こっていたかに眼を転じる必要がある。この問題は別稿に譲ることにしたい。

付記

本稿は、拙稿「帝国期日本のネーション形成と人種・民族研究の学知形成に関する移動論的研究：日本と台湾の博覧会事業および観光政策に注目して」(2010年、名古屋大学大学院環境学研究科博士論文)の一部を、新たに資料を加え書き改めたものである。

註

- 1) 社会学では小山(旧姓：久保)栄三(「人種学的社会学説」(大正14年)『社会学雑誌』19)や秋葉隆(「“Intensive Method”に就て」(昭和4年)『社会学雑誌』57)による紹介が早いケースと思われる。一方、人類学について馬淵東一は、歴史主義主流の段階から機能主義(及びインテンシブ調査)への重心の変化が起こった時期を1930(昭和5)年前後としている(馬淵 1954→1974)。
- 2) さらに日韓併合期の朝鮮調査を加えることもできよう(江上 1976→1986: 293)。ただし寺田(1981: 80)も留保するように、鳥居の調査は日本の領土拡張と歩みをともにしていたが故に、いまだ「経済的にも組織という点からも」十分な支援体制は整っていなかったという点には留意しなくてはならない。
- 3) 具体的には大橋から30円、徳富から20円の寄付金を受けているが(中園 2005: 17)、このうち大橋の寄付金は、『太陽』に記事を載せるというようなわけを出してくれたという(鳥居 1936b: 412)。鳥居の調査を支えた新聞社とのタイアップ関係がみてとれる。
- 4) 「東部台湾諸蕃族に就て」(9集104巻)、「有黥蕃の測定」(9集107巻)、「紅頭嶼の土人は如何なる種族よりなる乎」(10集116巻)、「南部台湾蕃社探検談」(11集125・126巻)、「台湾蕃地探検談」(13集146・147・148巻)。

- 5) 鳥居は1890(明治23)年の徴兵検査の前日に、当時ロンドン留学中の坪井からスタンリーの「アフリカ探検記」を送られている。そこには坪井の字で、「人類学はなお未開のアフリカの如し、これを開拓する者は誰ぞ」と書かれてあり、感動して読んだという(鳥居 1936b: 410)。
- 6) 鳥居と近代的な知覚装置との関係について、もうひとつ重要なのは聴覚メディア、つまり蓄音機の利用である。ただし、蓄音機が用いられたのは国内の調査に限られるため、本文では省略する。たとえば鳥居は徳川頼倫に依頼され、1901(明治34)年に岐阜県白川村から石川県能登半島までの横断調査に同行したとき、昔話や民謡を収録するために蠟管蓄音機を利用している(鳥居 1953: 215)。また1904(明治37)年に、上田万年の言語学講義をともに聴講していた伊波普猷と一緒に訪れた沖縄でも、島の言語や民謡を吹き込むために蠟管蓄音機を持参している。鳥居によると、沖縄本島で伊波と別れた後、彼は宮古島、八重山諸島、与那国島へとわたり、なかでも鳥居が「民謡の島」と呼んでいる八重山諸島では、「三十有余の八重山固有の祝詞、子守歌、俗謡」を録音したという(鳥居 1904; 1953: 226-30)。日本で蓄音機(フォノグラフ)が公開されたのは1879(明治12)年、その後は東京浅草の花屋敷(奥山閣)を筆頭に、日本各地で一般公開がなされ、明治20-30年代には軍歌や流行歌、歌舞伎俳優の声色などを数銭で聞かせてくれる蓄音機屋の姿が、街頭に溶けこんでいったという(倉田 1979)。また倉田が紹介している、当時の蓄音機の広告をみると、それが単なる娯楽鑑賞用ではなく、遺言を後世に保存するとか、遠隔地への手紙の代用といった伝達手段として、また外国語の独学や発音練習といった学習器具として期待されていたことが分かる。遠くはなれた民族の言葉や歌声を保存し、それを人類学研究に応用するという鳥居の発想も、こうした試みの一環として位置づけられよう。実際、先の沖縄調査について『東洋学芸雑誌』(明治37年8月)は、「就中注意すべきは俚歌童謡の蓄音なり」と強調し、「従来我邦に於て蓄音機と云へば娯楽にのみ供するものの様思はるる傾き有りしが此の如き实例に由つて學術上の応用を示したるは誠に喜ばしき事なり」と評価している。ちなみにこの蠟管は、「民謡の歌曲の旋律の研究」のため、坪井から田中正平(音響学)に手渡されたが、その後見つかっておらず、関東大震災の時に消失したのだろう、と鳥居は回顧している。
- 7) 例えば『東京人類学会雑誌』(明治29年2月)には、伊能嘉矩が送付した「台湾生蕃」の写真で大野延太郎が筆写したものが載せられている。
- 8) 大杉栄も、鳥居のアジア調査を「帝国主義的侵略事業」と批判していたとされるが(松本 1976: 734)、未見である。
- 9) 本文は読みやすさを考慮し、原文に句読点を加えている。
- 10) 「旅行日記」としての「出版時期」がもっとも早いのは、『蒙古旅行』(明治44年、博文館)である。
- 11) 鳥居が西南中国調査を行なった時期(1902-03年)には、ヨーロッパでも西南中国の旅行記や論文報告が立て続けに出版されていた(大林 1980: 304)。
- 12) 鳥居が調査者の「経験」を軸としたテキストの組み立て方をどのように考えていたかは、たとえば『蒙古旅行』の凡例にみることができる。そこでは、参考書の引用を極力避けること、地名・人名・物名はすべて口語・方言で記載すること、資料の地図はみずから作製した旅行順路のみを示したものを使い、地名も調査地を「精密」に記載する以外は「省略」すること、等々が試みられている(鳥居 1911: 4)。
- 13) 原文はフランス語。ただし引用は、全集に収録されている小林知生の訳文を用いている。なお「ヤミ族」というのは、紅頭嶼(蘭嶼)に居住する先住民をさすために鳥居が付けた呼称である。
- 14) ただし鳥居が「危険」地帯に向かおうとするほど、用意された護衛の数もいっそう増えている。

- 15) 「余は最初日本を出発する際、苗の土地は我が日本帝国の台湾の生蕃におけるが如く、全くシナ人との交通離隔し、絶えてその間に往来無きものと考えておったが、いま実際について黒苗の状態を見ると、初めの考えとは大いに異なっており、その風俗の如きは固有の状態を存じているとはいえ、一面にはシナの感化を受けていることもまたはなほ多い。ことに苗族の男子の如きは、その風全くシナ化して、少しもシナ人の男子と変わらないものがある。」(鳥居 1926 : 50)
- 16) この眼差しは、鳥居が「自然の背景の間に生蕃が生活している」と考えていた台湾調査以来のものであり(鳥居 1936b : 413)、晩年の自叙伝でも「原始的生蕃〔生蕃〕生活と地理的關係とが調和し、自然の雰囲気^{アムス}を形成する所は、私に人類と土地との関係を面白く感じさせた」(鳥居 1953 : 201)と語っている。
- 17) 現在、「彝〔イ〕族」と呼ばれる。
- 18) さらに鳥居は湖南省に入ると、危険を避けるためという理由で剃髪をし、辮髪(の付け髪)・中国帽・中国服を着用して中国人官吏に変装した(鳥居 1902)。
- 19) たとえば台湾通信(鳥居 1896b)では、「東部台湾は人類学上中々面白く土人は旧跡を存じ、聊も支那化せられ居らず。小生は西部より始めずして此人類学的博物館の觀ある東部より取調を為せしは今にして大に利益ありしを喜び居候」と述べている。また満州調査(第2回)でも、「私が配慮したのは、今なお純粹さを保っている満洲人だけを対象にすることであつた」と語る(鳥居 1914 : 206)。さらに、こうした純粹な民族を求める姿勢は、通訳の選択にも及ぶ。たとえば『蒙古旅行』(1911年)では、「シナ化」・「蒙古化」した通訳(とそれに依存した旅行者)が揶揄されている。「從來日本人及び外国人の蒙古に旅行せし人々は、皆通弁を雇ひ、之に抛りて其の旅行をなしたるものなるが、是等の通弁は如何なる種類の間人なるかと云ふに、多くは年少の頃より蒙古地方に行商を為しつつあるシナ人なり。即ち彼等は其の少年時代より蒙古の内地に入り居るを以て、下品ながらも多少蒙古語を解し、若し旅行者にしてシナ語に通じ居る人なれば、彼等を伴ひ行く事は最も便宜多し。……〔ただし、〕彼等はその品性下劣人間のみなれば、旅行中蒙古人の家に宿泊せる際の如き、旅行者より贈る謝礼金等は半ば己の懐を肥やし、僅かに其の半を先方に渡すが如き事往々にして之れあり。又物を尋ねる際に於ても、其の通訳多くは正しからざるが如きものあり。又南方の蒙古人にして、シナ語に通ずる者をも通弁として雇ひ得るれど、シナ語に通ずる蒙古人は、概して其の性質既にシナ化せられたるもののみにして、余り快き同伴者には非ざるなり。即ち蒙古の旅行をなさんとすものは、之等二種の通弁中孰れかを選ばざる可からざるものなれども、蒙古通の人^{モンゴル}に非ざれば彼等を雇ふ事は非常に困難なるを以て、普通は北京若しくは満洲方面にて、シナ人を雇ひ之と共に旅行するもの多し。又或種の人^{モンゴル}は其のシナ語に通ずるに任せ、单独旅行を試みるものあれども、北方の蒙古地方はシナ語の行はれざる区域なれば、之等の人々は啞の旅行をなすものにして、只目に見る物以外には、聞く事も知る事も得ざるなり」(鳥居 1911 : 29-30)。
- 20) 「相互に隔絶した無縁の種族」や、「本来の純粹性」を失うことなく「民族的純度がよく保たれている」民族を調査したという鳥居自身の説明は、小林知生の鳥居評価に何の疑問もなく引き継がれている(『鳥居龍藏全集(5)』の解説を参照)。
- 21) 鳥居が用いた写真技術を当時の時代状況から推論している野林(1997)によれば、鳥居の乾板写真は、カメラの重量や撮影操作の点から手持ちの撮影は不可能であり、三脚で固定する必要があつた。また連続撮影も難しく、撮影する時には被写体が動かないように、いく時間か拘束する必要があつた。

参考文献

- Barthes, Roland. (1984) *Le Bruissement De La Langue*. (=1987年, 花輪光訳『言語のざわめき』みすず書房.)
- Clifford, James. and Marcus, George E. (eds.) (1986) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press. (=1996年, 春日直樹他(訳)『文化を書く』紀伊国屋書店.)
- Clifford, James. (1988) *The Predicament of Culture: Twentieth-Century Ethnography, Literature, and Art*, Harvard University Press. (=2003年, 太田好信他(訳)『文化の窮状：二十世紀の民族誌, 文学, 芸術』人文書院.)
- (1997) *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*. (=2002年, 毛利嘉孝・有元健他訳『ルーツ』月曜社.)
- 江上波夫 (1970) 「作品解説『満蒙を探る』」泉靖一(編)『失われた文明を求めて』文芸春秋：518-520.
- (1976→1986) 「鳥居龍蔵博士のこと」『江上波夫著作集②』平凡社：269-301.
- 福間良明 (2003) 『辺境に映る日本』柏書房.
- 五井信 (2000) 「表象される〈日本〉」金子明雄・高橋修・吉田司雄他(編)『ディスクールの帝国』新曜社.
- 日比嘉高 (1999) 「創刊期『太陽』の挿画写真：風景写真とまなざしの政治学」筑波大学文化批評研究会(編)『植民地主義とアジアの表象』筑波大学文化批評研究会, pp. 61-87.
- 飯沢耕太郎 (1992) 『日本写真史を歩く』新潮社.
- 倉田喜弘 (1979) 『日本レコード文化史』東京書籍.
- Leiris, Michel. (1966) *Brisées, avec un portrait de l'auteur par Picasso*. (=1971年, 後藤辰男訳『猥道』思潮社.)
- 馬淵東一 (1954) 「高砂族に関する社会人類学」(→1974年, 『馬淵東一著作集(1)』社会思想社.)
- 松本清張 (1976) 「解題」『鳥居龍蔵全集12』.
- 中園英助 (2005) 『鳥居龍蔵伝』岩波書店.
- 野林厚志 (1997) 「鳥居龍蔵の乾板写真術」『精神のエクスペディション』東京大学出版会.
- 大林太良 (1976) 「改題」『鳥居龍蔵全集(7)』朝日新聞社：625-35.
- (1980) 「解説」鳥居龍蔵『中国の少数民族地帯をゆく』朝日新聞社.
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源』新曜社.
- Passaro, Joanne. (1997) “‘You Can’t Take the Subway to the Field!’: ‘Village’ Epistemologies in the Global Village,” in Akhil Gupta and James Ferguson (eds.) *Anthropological Locations: Boundaries and Grounds of a Field Science*, University of California Press: 147-162.
- Rosaldo, Renato. (1986) “From the Door of His Tent: The Fieldworker and the Inquisitor,” in James Clifford and George E. Marcus (eds.) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press. (=1996年, 西川麦子(訳)「テントの入口から」春日直樹他(訳)『文化を書く』紀伊国屋書店所収.)
- 齋藤一 (1999) 「日本の『闇の奥』」名波弘彰他(編)『植民地主義とアジアの表象』筑波大学文化批評研究会.
- 坂野徹 (2005) 『帝国日本と人類学者1884-1952年』勁草書房.
- 佐々木高明(編) (1993) 『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館.
- 芹沢長介 (1963) 「鳥居龍蔵論」『思想の科学』18：58-64.
- 末成道男 (1988) 「鳥居龍蔵」綾部恒雄(編)『文化人類学群像(3)』アカデミア出版会.

- 田畑久夫 (1997) 『民族学者・鳥居龍蔵：アジア調査の軌跡』 古今書院.
- 田中純一郎 (1980) 『日本映画発達史Ⅰ』 中央公論社.
- 寺田和夫 (1981) 『日本の人類学』 角川書店.
- 東京大学総合研究資料館 (編) (1991) 『乾板に刻まれた世界：鳥居龍蔵の見たアジア』 東京大学総合研究資料館.
- 鳥居龍蔵 (1895a) 「西比利亜の土人」『鳥居龍蔵全集(7)』 朝日新聞社：546-52.
- (1895b) 「在旅順鳥居龍蔵氏よりの来書」『東京人類学会雑誌』 113：452-54.
- (1896a) 「遼東半島」『鳥居龍蔵全集(8)』 朝日新聞社：573-97.
- (1896b) 「鳥居龍蔵氏 の 消息」『東京人類学会雑誌』 129：121-22.
- (1896c) 「鳥居龍蔵氏 の 近信」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：459-60.
- (1897a) 「台湾探検者鳥居龍蔵氏 の 消息」『東京人類学会雑誌』 139：35.
- (1897b) 「鳥居龍蔵氏 よりの通信」『東京人類学会雑誌』 141：116-18.
- (1897c) 「伊能嘉矩氏 と 鳥居龍蔵氏 と の 会合」『東京人類学会雑誌』 141：118-19.
- (1897d) 「台湾生蕃地探検者の最も要す可き知識」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：408-15.
- (1899) 「台湾東南部の人類学的探検」『東京人類学会雑誌』 155：195-98.
- (1901a) 「台湾蕃地探検談」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：422-31.
- (1901b) 「台湾中央山脈の横断」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：431-59.
- (1901c) 「北海道千島に於ける人類学的調査に就て」『東京人類学会雑誌』 189：109-12.
- (1902) 「在清国鳥居龍蔵氏よりの来書」『東京人類学会雑誌』 (明治35年10月) 199号：36-37頁.
- (1903a) 「在清国鳥居龍蔵氏よりの来書」『東京人類学会雑誌』 202：166-70.
- (1903b) 「苗族ト猯羅ニ就テ」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：357-68.
- (1903c) 「支那に於ける苗族の地理学的分布竝に其の現状」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：368-83.
- (1903d) 「鳥居龍蔵氏よりの清国通信」『東京人類学会雑誌』 204：252-53.
- (1904) 「鳥居龍蔵君琉球通信」『東京人類学会雑誌』 221：451-52.
- (1905) 「苗族は現今如何なる状態にて存在する乎」『鳥居龍蔵全集(11)』 朝日新聞社：383-96.
- (1907) 「苗族調査報告」『鳥居龍蔵全集(11)』.
- (1910) 「人類学研究・台湾の原住民(-)序論」『鳥居龍蔵全集(5)』 朝日新聞社.
- (1911) 「蒙古旅行」『鳥居龍蔵全集 (第九卷)』 朝日新聞社.
- (1914) 「人類学研究・満洲族」『鳥居龍蔵全集(5)』 朝日新聞社.
- (1926) 「人類学上より見たる西南支那」『鳥居龍蔵全集(10)』 朝日新聞社.
- (1927) 「日本人類学の発達」『鳥居龍蔵全集(1)』 朝日新聞社：459-70.
- (1936a) 「滿蒙其他の思ひ出」『鳥居龍蔵全集(12)』 朝日新聞社：1-136.
- (1936b) 「学生生活五十年の回顧(-)」『鳥居龍蔵全集(12)』 朝日新聞社：408-14.
- (1953) 「ある老学徒の手記」『鳥居龍蔵全集(12)』 朝日新聞社.
- 梅棹忠夫 (1991) 「回想の民族学」『梅棹忠夫著作集(10)』 中央公論社：595-614.
- (1992) 「民族学と写真」『梅棹忠夫著作集(11)』 中央公論社：549-66.
- 山路勝彦 (2004) 『台湾の植民地統治：〈無主の野蛮人〉という言説の展開』 日本図書センター.
- 山室信一 (2006) 「国民帝国・日本の形成と空間知」『「帝国」日本の学知(8)』 岩波書店：20-76.
- Van Maanen, John. (1988) *Tales of the Field: On Writing Ethnography*. (=1999年, 森川渉訳『フィールドワークの物語』 現代書館.)